



M 2 富永 健斗 《彩ずる間》FRP樹脂・鉄  
右 高さ1600 × 幅1300 × 奥行650 (mm) 左 高さ1500 × 幅1300 × 奥行650 (mm)  
「具象彫刻制作における「量のコントラスト」の追求」より

《彩ずる間》  
具象彫刻制作における「量のコントラスト」の追求  
《Colored Space created by Two Flamingoes》  
On Pursuit of Contrasting Volumes through Representational Clay Sculpture

富永 健斗  
Kento TOMINAGA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻  
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



図1 《彩ずる間》 FRP樹脂・鉄  
右 高さ1600 × 幅1300 × 奥行650 (mm)  
左 高さ1500 × 幅1300 × 奥行650 (mm)

## はじめに

稿者が彫刻を始めてから6年が経とうとしている。これまで稿者は人物像の制作を基本としてきたが、その際、具象と抽象という造形上は対極にある2つの表現手段を用いて人物像の制作を試みてきた。具象とは、20世紀に現われた自然や現実を再現描写しない抽象芸術に対して、一般的に従来の再現的な表現を総括するために使用され始めた概念である。本研究において稿者が言う「具象」的表現も、目の前に存在する自然の形象を客観的、再現的に表現することを意味している。また、抽象とは、一般に自然の再現によらず、線と色と形の組み合わせによって表現されたものを指すが、本研究において稿者が言う「抽象」的表現とは、自身のイメージを優先させて自然や現実の形象をデフォルメしたり、不要な箇所を取り去ったりしながら表現することを意味している。具象表現と同時に抽象表現も追究してきたのは、彫刻を始めた当初から現在に至るまでベースとしている人物表現のための手掛かりを探すためであった。つまり、具象的表現と抽象的表現の間を行き来することが、稿者にとっては制作において「新しい形」を見出すための手段であったのである。しかし、抽象的表現によって制作した作品を他者に見せると、「よく分からない」という感想が多く、稿者が本当に表現したいことは結局何であったのか次第に自分でも分からなくなってきた。

こうした経験を踏まえ、本修了研究では、基本としてきた具象的表現に立ち返り、ス

トレートに思いや表現したかったことを伝えるためにはどうしたら良いか、またそもそも自分が表現したいものは何なのかを明らかにしてからテーマを設定することにした。そしてこれまで人物像制作において重視してきた具象的表現と抽象的表現双方から「立体表現」を再考し、テーマを「彫刻の具象的表現における量のコントラストの追究」とすることにした。

## 1 研究テーマ

### 1-1 研究テーマ「量のコントラスト」について

「量のコントラスト」とは、人体像制作で言えば、胴体の量と腕や脚の量の比率ないしはヴォリューム感の違いのことである。それは、稿者がこれまでの人体像制作の経験の中で興味を抱いてきたテーマであった。本研究では、フラミンゴをモチーフとして、そのコントラストを追求した。フラミンゴをモチーフにしたのは、近所の動物園にスケッチに行った時、ふとフラミンゴの群れの前で足が止まり、スケッチしたのがきっかけであった。フラミンゴをスケッチしていくうちに、中心から膨らんだ形体が宙に浮いているように見え始め、胴部の大きさとは対照的に細長い脚部でバランスをとっている姿に魅力を感じたのである。

そしてその後もフラミンゴを見に度々動物園へ通って観察を続けていくうちに、フラミンゴは、学部時代から今日に至るまで学び、制作してきた人物塑像の「量のコントラスト」を大いに生かせる題材であると考えるに至った。

## 1-2 抽象的表現から具象的表現へ



図2 《gesto》  
修士1年時の作品

稿者は、修士1年時にフラミンゴを人物像と関連づけた作品《gesto》(図2)を制作した。フラミンゴのヴォリュームのある形体と線からなる姿が印象的であっただけでなく、様々な動きをする姿が何より稿者の目を引き、人が日常で見せる、何気なくはあるが、面白く美しくもある「仕草」と似ていると思い、人物をデフォルメさせ、フラミンゴを見た時に感じたヴォリュームのある形を意識しながら、抽象表現によって《gesto》を制作した。しかし、上述のように、抽象形体を制作して他者に作品を見せても、稿者の考えと異なる感想が多かった。そして、ある日フラミンゴを観察している時に、フラミンゴそのものをそのまま写実的に表現した方が却って自分が出会った時の感動をストレートに伝えられるのではないかと思うようになった。また、これまで人体像の制作では具象表現を勉強してきたことも、抽象表現を用いなかった理由のひとつである。

## 1-3 2体1対にする理由

稿者は、他者に作品を鑑賞してもらう際、作品だけでなく、作品を取り巻く「場所」や「時間」を感じさせる空間(スペース)をも鑑賞してもらいたいと考えている。本研究でフラミンゴを2体の群像にしたのも、フラミンゴを取り巻く空間(スペース)を感じてもらいたかったからである。

群像によるフランス近代の彫刻作品を1例挙げれば、19世紀を代表するフランスの彫刻



図3 《カレーの市民》  
1888年 ブロンズ

家オーギュスト・ロダンの《カレーの市民》(図3)が挙げられるが、ロダンの群像表現からは他の作品にはない臨場感のある空間が感じられる。それは、その群像によって、その場所だけが切り取られた空間であるかのような錯覚を観者に引き起こす。立体像と立体像が生み出す空間や物語性、方向性は、鑑賞者の視線を誘導し、その場のスペースを観者に考えさせる。

以上のような理由から、稿者は作品を2体1対の群像にすることにした。

## 2 修了制作の過程

### 2-1 エスキースから芯棒制作まで

続いて実際の制作工程について述べていく。まず、動物園で行ったフラミンゴのクロッキーをもとに、実物の1/5ほどのマケット(図4)を制作した。その際、現在、



図4 マケット

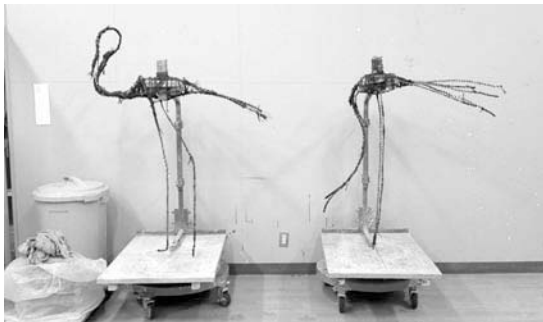


図5 芯棒の状態

彫刻分野で原型を置き換えるための素材として多用されている FRP 樹脂を使用した  
が、この時、マケットの脚部にヒビ割れが生じ、本制作に取り掛かる上で2つの問題  
が明らかとなった。つまり脚部の非耐久性と不安定さの問題である。

マケット制作段階で発生した上述の問題から、本制作では脚部を鉄の棒で制作する  
ことにした。こうして、2体の動きの異なるポーズのうち、1体は1本足で立ち、し  
かも首を水面下に近づけるポーズを可能と

させた。

次に完成形の大きさを想定して芯棒を作る過程に移行したが、稿者がフラミンゴを観察した時の感動を観者に強く訴えるには、等身より大きく作る方がよいと考え、等身の約1.5倍になるように制作することにした(図5)。

## 2-2 塑像制作

鉄の支柱の1  
点に胴部を表現  
するための膨大  
な粘土を付ける  
ため、原型制作  
時に早くも倒壊  
する恐れがあっ  
た。そこで断熱  
材をカットした  
ものを嵩まし用  
に用いて粘土の  
量を極力少なく  
するようにした(図6)。



図6 断熱材による軽量化

## 2-3 石膏型取り

続いて完成した胴体と首、頭部部分の粘土原型を、石膏によって型取りした。脚部には後で鉄棒を接合することにしていたが、接合口は鉄棒を挿入する方向に合わせて成型しておく必要があるため、エスキースを見て2体のフラミンゴの脚の先の足が地面に着く時の方向を確認しながら水粘土で接合口を成型した(図7)。

石膏取りの時には、切り金と呼ばれる約10 mm × 20 mm にカットしたアルミ性のチップを粘土原型に打つが(図8)、その際、後述する FRP 樹脂の型合わせ時に、



図7 粘土による接合口の制作



図8 粘土原型への切り金打ち

胴体の内部から鉄棒の接合部分を FRP 樹脂によって完全に固定するために、両手を入れられるくらいの蓋を作れるように、切り金のラインを決めた。

#### 2-4 FRP 樹脂の型取り

本作品は、モチーフであるフラミンゴの形態の特徴上、胴部は可能な限り軽い素材に置き換える必要があった。そこで石膏型から置き換える素材として FRP 樹脂を選択した。FRP 樹脂は薄くても強度があるが、石膏型に樹脂を塗っていく際に樹脂の厚みが均一でなければ効果を発揮しない。そこで、タルクと呼ばれる白い粉を入れ



図10 接合口の位置

て FRP 樹脂の硬さを微調整し、上方や側面の樹脂が底部に垂れてこないようにした (図9)。

続いて脚部の接合口の固定を試みた。直径20 mm の鉄パイプをカットして、実際にそれを接合の挿入方向を確認しながら挿入し、FRP 樹脂で固定した (図10)。

#### 2-5 成形

稿者は粘土原型時の粘土の質感や粘土特有の雰囲気を感じていたため、他の素材に変換されると急に感動が薄れてしまうということがこれまで度々あった。それ故、粘土原型時の記憶を頼りに、質感に



図9 FRP 樹脂一層目



図11 成形時の様子

違和感のある部分に、ルータや鬼目やすりといったカービング用の道具で成形を施した(図11)。

## 2-6 台座制作



図12 脚部の接合部分の溶接作業の様子

続いて台座の制作に入ったが、台座はフラミンゴの脚部の鉄棒を溶接によって固定できるように、鉄板にすることにした。フラミンゴを観察していた時から、展示用の台座は波紋を連想させる円い形にしたいと思っていた。しかし、稿者の今の技術では制作は不可能であるため、熊本の猪本鉄工所の猪本氏に鉄板のカットと溶接を依頼した(図12)。

## 2-7 着色



図13 着色時の様子

本作品で用いたFRP樹脂の本来の色は、彫刻作品としての重量感に欠けるように思われたため、実際に用いたのが樹脂であることがわからないよう、着色によって素材感を出すようにした。稿者にとって素材感とは、ブロンズや石といった有機的な素材が持つ質感を指している。稿者は、本作品にもブロンズや石がもつ重量感をもたせたいと考え、過去に鑄造したブロンズ作品の色などを参考にしながら着色することにした(図13)。

## 3 反省と展望

反省すべきところは制作計画であった。取り掛かりが遅いのが稿者の欠点で、そのために大変苦勞した。しかし、様々なアシデントや思うように制作が進まない時期はあったものの、先生方や友人、後輩、そして作品制作を応援してくれた家族の支えがあって作品を完成させることができた。稿者はこのことに大変感謝している。

自身の思いをダイレクトに伝える方法として、これまで学んできた具象表現を活かし、異素材と組み合わせて立体表現ができ

たことは、これから先も作品を制作していく稿者の大きな自信となった。

[参考文献一覧]

- ・建畠覚造 他『彫刻をつくる』美術出版社  
1965年 20頁
- ・竹内敏雄監修『美学事典』増補版 弘文堂  
1977年 216頁
- ・『新潮世界美術辞典』新潮社 1985年 423  
頁



